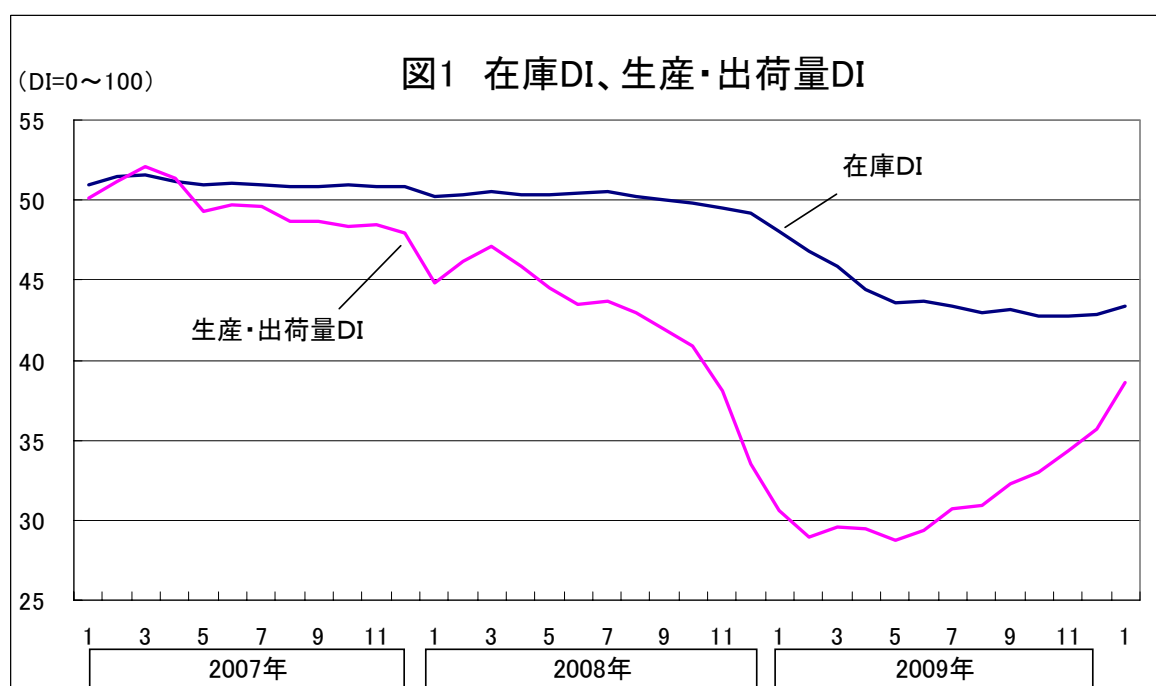


在庫DIの推移〔在庫DI〕

- ・在庫DIは2008年9月まで50を上回る
- ・2007年5月から2008年9月まで意図しない在庫増
- ・在庫DIは2009年6月から踊り場局面
- ・在庫調整は進展している

TDB 景気動向調査には、在庫の増減を表す指標として在庫DIがある。在庫DIとは、調査先企業に、在庫が前年同月と比べて「非常に増加した」から「非常に減少した」までの7段階で回答してもらい、0～100で表した指標である。50が判断の分かれ目となり、50より水準が高ければ在庫は増加しており、低ければ減少していることを表す。

企業は出荷が増加しはじめると、景気が良くなり需要が増加することを見越して製品を増産し、意図的に在庫を増やす。また、景気が悪化するときには、モノが売れなくなるため、出荷が減少し、意図せずに在庫が増える。在庫が増えすぎると、企業は減産により在庫を減らす。このように、在庫の増減は生産、出荷と密接な関係にあるため、生産・出荷量DIとともに在庫DIについて考える。



在庫DIは、2008年9月まで判断の分かれ目である50を上回り、生産・出荷量DIは2007年4月まで50を上回っていた(図1)。企業は2007年4月まで生産・出荷量を増加させ、意図的に在庫を増加させていたことがわかる。しかし、サブプライム問題による外需の失速や、原油・素材価格の高騰などにより、2007年5月から2008年9月ま

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および無断引用を固く禁じます。

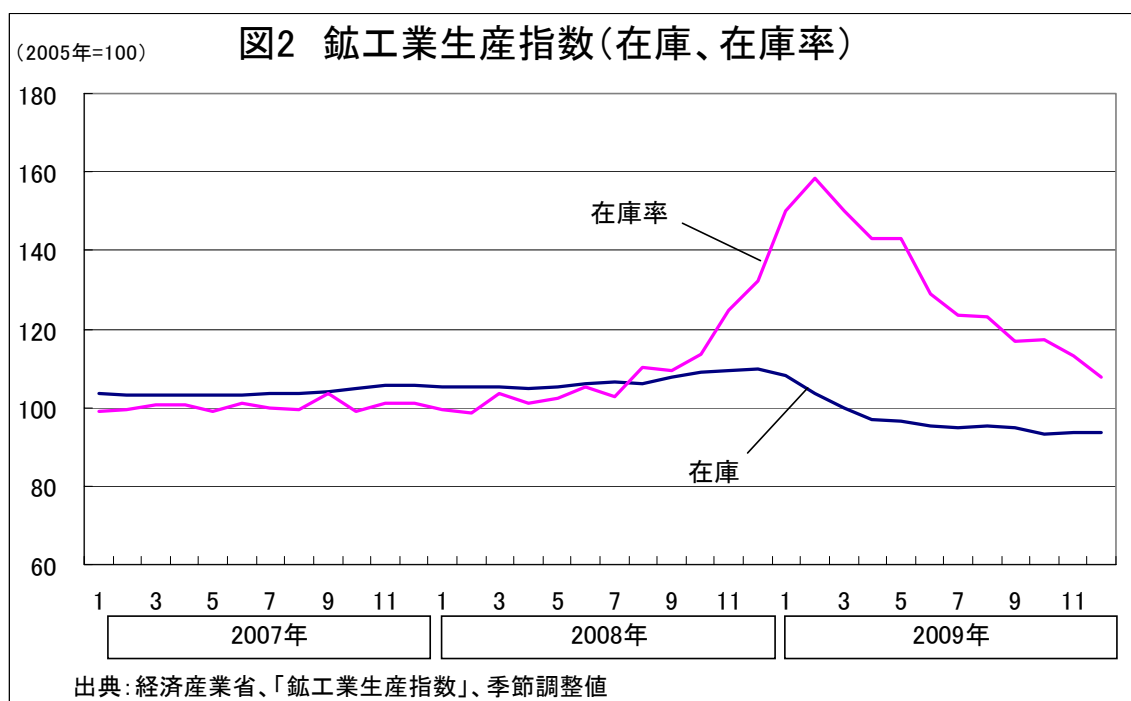
## DI 分析レポート

TDB 景気動向調査 (URL : <http://tdb-di.com/>)

では意図せずに在庫が増加した。

2007年5月から生産・出荷量DIが50を下回り、生産・出荷量は減少し、それに続いて2008年10月から在庫DIも50を下回り、在庫は減少しはじめた。2008年9月のリーマン・ショックを発端とした金融危機の拡大による輸出不振や消費不振で、生産・出荷量DIは2008年秋から2009年初めにかけて急速に低下し、大幅な減産による在庫調整が行われた。そのため、在庫DIは2008年冬から2009年春にかけて急速に低下したが、減産以上に需要の減少が大きかったため、生産・出荷量DIより緩やかな低下となった。

2009年6月以降、生産・出荷量DIはエコカー減税、エコポイント制度など政策的な消費刺激策や、中国など新興国の需要増による外需にけん引され改善傾向にあり、2010年1月には2008年11月の水準を超えた。在庫DIは生産・出荷量DIの改善にあわせて下げ止まり、現在は踊り場局面が続いている。生産・出荷量DIが改善し、前年同月比での生産・出荷量の悪化幅は縮小傾向にあるが、在庫DIの減少幅は横ばいが続いており、在庫調整が進展していることがわかる。



経済産業省が毎月公表している鋳工業生産指数 (2005年=100) の動きをみると、在庫は2008年12月まで増加傾向にあり、在庫率が2008年8月から2009年2月まで急速に上昇した。在庫は2009年1月から減少傾向となり、在庫率も2009年3月から低下傾向にある (図2)。鋳工業生産指数は、2005年を基準年とした鋳工業のみの指数であるため、前年同月比ですべての業界を対象とした在庫DIと単純に比較をすることはできないが、鋳工業生産指数からも、在庫調整が進んでいることがわかる。

**DI 分析レポート**TDB 景気動向調査（URL : <http://tdb-di.com/>）

今後、出荷量がさらに増えれば、将来の需要増を見越して企業が製品を増産し、在庫 DI も上向きに転じる見込み。最近では POS システムなど、情報技術を活用した在庫管理方法が発達し、企業は製品の売れ行き状況を素早く把握し、在庫を調整できるようになっている。今回は需要の減少が急速だったため、在庫率が急速に高まり、大幅な在庫調整が必要となった。在庫調整技術の発達により在庫の大幅な増減はなくなっていくため、在庫 DI は、長期的には大幅に増加しないとみられる。

(産業調査部 経済動向研究チーム K. S)